

メッセージアウトライン コリント人への手紙 第一6:13~20 「自分のからだをもって神の栄光を現す」

[13]「食物は腹のためにあり、腹は食物のためにあります。ところが神は、そのどちらをも滅ぼされます。からだは不品行のためにあるのではなく、主のためであり、主はからだのためです。神は主をよみがえらせましたが、その御力によって私たちをもよみがえらせてくださいます」

「食物は腹のためにあり、腹は食物のためにあります」このことばをそこだけ聞けば、もっとものように聞こえるが、実はコリント人たちは、これと関係させて、「性欲は遊女のために、遊女は性欲のために」とことばを続けていた。彼らの言い分は次のようなものであった。「食べ物に関してもクリスチャンの良心は自由であり、もはや旧約時代のようにさまざまな規定で縛られることはない。→ I コリント8:8、10:25、ローマ14:3、コサ12:16 それでいかなる食物を食べても文句なしというなら、どこのいかなる対象を相手にして性欲を満足させてもよいのではないか」これは全く独りよがりな比較であり、パウロはその間違いを指摘する。食物も腹すなわち食欲も一時的なものであり、やがて滅びてなくなってしまう。しかし、からだは私たちの存在、人格そのものであり、やがてキリストの復活にあずかり、栄光の姿に変えられる。それゆえからだは不品行のためにあるのではなく、主のためであり、主はからだのためなのである。これこそクリスチャンと主なる神との間の密接な関係。一時的なものである食物や腹と復活によって永遠に至るからだとを比べることはできない。

[15-17]「あなたがたのからだはキリストのからだの一部であることを知らないのですか。キリストのからだを取って遊女のからだとするのですか。そんなことは絶対に許されません。遊女と交われば、一つからだになることを知らないのですか。『ふたりは一体となる』と言われているからです。しかし、主と交われば、一つ霊となるのです」

クリスチャンのからだはキリストのからだの一部。→ I コリント12:20、27、ローマ12:5、コサ1:18、24 そのからだをもって遊女と交わるならば、それはキリストのからだを遊女のからだとすることであり、キリストと教会との関係を破壊してしまう重大な罪。パウロがここで引用しているのは創世記2:24のことば。これは二人であった者が結婚によって一つの分けることのできない肉のかたまりとなることを意味し、同様にキリストのからだの一部であるクリスチャンが遊女と交わることによってキリストのからだを遊女のからだとしてしまう。こんなことはあってはならないことである。しかし、同じ交わりでも主との全人格的な交わりは一つ霊とされる。それは聖霊の働きによる。→ローマ8:9~11

[18]「不品行を避けなさい。人が犯す罪はすべて、からだの外のものです。しかし、不品行を行う者は、自分のからだに対して罪を犯すのです」

不品行という罪に対しては戦うのではなく避ける。ヨセフの例→創世記39:12

不品行はキリストのからだである教会の一体性を損なう。まさに自分のからだに対して罪を犯しているのである。

[19-20]「あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現しなさい」

クリスチャン一人一人のからだは神から受けて住んでおられる聖霊の宮。→ I コリント3:16
すべての信仰者はこの自覚を持たなければならない。私たちはイエス・キリストの十字架の死という代価を払って買い取られたのである。それゆえコリント人も世のすべてのクリスチャンもこの驚くべき恵みにあずかっている者として、自由をはき違えた汚れた生き方を捨て、自分のからだをもって神の栄光を現す生き方に励まなければならない。